

令和2年度年報発刊にあたって

ここに、令和2年度に当研究所の各研究員が行った検査・監視・調査研究の成果等を取りまとめた京都府保健環境研究所年報第66号（2021年）をお届けいたします。

2019年に中国武漢市で発生した新型コロナウイルス感染症（COVID-19）は瞬く間に世界中に拡がり、2021年12月12日現在で、世界保健機関（WHO）の統計によると、のべ2億6700万人が感染し、528万人が死亡し、毎日約61万人が新たに感染しています。まさに、21世紀最大のパンデミック（世界的大流行）です。日本に目を向けますと、COVID-19の第5波は8月末をピークに急激に収束に向かいましたが、この原因は人間側の様々な対策の結果なのか、またはウイルス側の変化によるものなのかは不明のままです。京都府でも新規患者数がゼロの日もあり、ようやく落ち着いたかに見えましたが、11月末からオミクロン株という新たな変異株が南アフリカで急激に感染拡大し、飛行機という輸送手段により急速に世界各地に拡がっており、日本では急遽すべての入国を停止し、空港検疫を厳しくして水際作戦を開始しました。しかしながら、京都府でも12月中旬にオミクロン第1号が検出されて以降、第6波が到来し、陽性者数は増加の一途を辿り、1月に入り急速に感染者数は激増、1月27日にはまん延防止等重点措置が出されました。1月31日現在で陽性者は全国で1日6万人を超え、京都府でも2,216人と、この1週間はほぼ2,000人を超えています。この文章を書いている2022年2月1日の時点で第6波がいつ終息するのかはわかりませんが、マスク着用、手洗い、物理的距離の確保、換気、ワクチン接種など有効な感染予防対策を確実に実施しながらこの難局を越えなければなりません。

当研究所におきましては、これまでのPCR検査に加えて、短時間で大量検体処理が可能のように空港検疫所でも採用されている抗原定量法を導入し、全所あげて対応しているところです。さらに変異株への対応として令和3年6月より次世代シーケンサーによる全ゲノム解析を、9月より京都府立医科大学附属病院との連携強化による変異株スクリーニングを開始し、COVID-19への新型コロナウイルス検査および変異株解析の体制充実を図り、オミクロン株もいち早く検出することができました。

このような状況下ではありますが、令和2年度年報を発刊することができました。掲載内容は、感染症分野では、SARS-CoV-2の疫学的特徴を検討した報告（第2報）とCOVID-19の臨床的特徴でもある味覚・嗅覚異常に関する検討、また放射線・大気分野では、京都府内の海底土中の¹³⁷Cs（セシウム137）放射能濃度と土壌の粒子径の影響に関する検討と2020年の京都府の大気環境を窒素酸化物（NO_x）、光化学オキシダント（O_x）、微小粒子状物質（PM_{2.5}）について、過去5年間のデータと比較した報告、さらに水質環境分野では、ゴルフ場で使用される農薬のガスクロマトグラフ質量分析計を用いた一斉分析法の検討と産業廃棄物最終処分場浸出水のクロム（VI）の測定法の報告、の計6編を掲載することができました。本年報をご高覧いただき、忌憚のないご意見・ご批判をいただければと思います。

今後とも、皆様方のご理解とご支援をよろしくお願い申し上げます。

令和4年3月

京都府保健環境研究所 所長 藤田直久